

経済産業大臣賞（優秀賞）

田んぼに映るもう一つの空

群馬県 群馬大学共同教育学部附属中学校 三年 小林 衣智花

朝の冷たい空気の中、自転車のペダルをこいで学校へ向かう。通学路の横には広い田んぼが広がり、張られた水が静かな鏡のように空を映している。白い雲がゆっくり流れ、その姿は水の中でも同じように動いている。まるで空が地面の上に、もう一つ生まれたようだった。

私は毎日この道を通って学校へ行く。それでも、田んぼの水面に映る空を見るたびに、不思議な気持ちになる。

ある日の帰り道、夕焼けに染まった田んぼの前で私は自転車を止めた。赤く染まった雲が水面に映り、風に揺れてゆっくり形を変えている。その景色を見ながら、ふと考えた。

この水は、どこから来たのだろう。

私たちは毎日、水を当たり前のように使って生活している。朝、顔を洗うとき。のどが渴いて水を飲むとき。料理をするときやお風呂に入るとき。蛇口をひねれば水は流れてくる。私はそれが当然のことだと思っていた。

しかし授業で水の循環について学んだとき、その当たり前の意味が少し変わった。海の水は太陽の熱で蒸発し、雲となり、雨や雪となって地上に降る。そして川となって流れ、再び海へ戻る。水は形を変えながら、長い時間をかけて地球をめぐっているのだという。

その話を聞いたとき、私は毎日自転車を通る田んぼの水を思い出した。あの水も、遠い海から始まった長い旅の途中なのかもしれない。そう思った瞬間、いつもの通学路が少し違う景色に見えた。

群馬県には、関東を流れる大きな川、利根川がある。山に降った雨や雪は川となり、その流れは遠くの町や人々の暮らしを支えている。利根川の水は農業や工業、そして私たちの生活にも使われていると聞いた。田んぼに張られた水も、そうした川の流れとどこかで

つながっているのだろう。

水があるから稲は育ち、秋には黄金色の穂を実らせる。そしてお米となって、私たちの食卓に並ぶ。私はそのことに気づいたとき、水はただ流れているだけのものではなく、命や暮らしを支える大切な存在なのだと感じた。

しかし水は恵みだけではない。ニュースでは、大雨による洪水や水不足の問題が伝えられている。水は私たちの命を支える存在であると同時に、大きな自然の力でもあるのだ。

だからこそ人々は昔から水と向き合い、知恵を重ねてきた。堤防を築き、水路を整え、ダムをつくり、水の流れを調整する。そうした努力の積み重ねがあるからこそ、私たちは水の恵みを受けながら安心して生活することができている。

私はこれまで、水を使うときにその背景を考えたことがなかった。しかし今は、蛇口から流れる一滴の水の向こうに、長い自然の循環と多くの人々の努力があることを想像するようになった。

もし私が水が無駄に使えば、その一滴は本来どこかで必要とされていたかもしれない。そう思うと、水を大切にすることは決して小さなことではないと感じる。

今日も自転車で通る途中、田んぼの水面には夕焼けの空が映っていた。赤く染まった雲が水の中でゆっくり揺れている。その景色は、まるで空がもう一つ地面に広がっているようだった。

私はその景色を見ながら思う。

この水は、どれほど長い旅をしてきたのだろう。

海から空へ、空から雨へ、雨から川へ、そしてまた海へ。

水を大切にすることというのは、未来の空を守ることなのだ。